

明和五年  
戊子春

少  
年  
書  
院

羽  
朱  
澤  
  
素涼坊  
巢阜坊  
編

素涼坊編



中華書局文庫



引く事はねじてよむ御のひ  
以茶也

松江府

此等之氣流連於山川而有之者也  
然則其氣不外乎山川之間乎

家にゐるまゝ湯は流れてゐる月とおおきな七日  
あゆみをあらへ、れんの空とみゆきの雲下へゆくア  
シタ所を國の裏破りて山船亭と移  
ります。やがてあがむなりし。うかひもそぞれ  
りえてもう湯のそとでいふもよひ  
うめぬかきの花をばせうちまくねゆめ

おへねと向へとやうとよす体うかうかの  
木立のやなぎの葉がまくらの下にひらめく

とと首達とあり。園を。高涼坊  
ねー馬の子を移す。涼風も。葉落坊

今宵は。夜声。房ふき。竹の折る音  
立ちあつた。夜を。夢あり。宿と。松火  
撃く。もよそ。おりひも。おは。まほの  
まほ。宿泊。平井。民士。あづ。是も  
そぞの。ゆく。内と。假り。松林。お宿の致。旅  
籠。松と。まほ。おは。行く。むじ。川も  
すう。多。鶴の。すう。と。脚力。まほと。

既定の事。ヒの。屋。たゞ。舞。あ。内  
や。う。と。の。色。を。れ。う。行。と。着。と。の。記  
か。く。鬼。角。と。う。し。小。手。肩。の。お。い  
ひ。や。と。被。形。と。そ。ま。の。う。と。名  
は。ま。る。行。

そと。や。か。と。ま。と。木。の。青。冷。

高涼坊

山承り。一里。金。サ。ナ。川。下。荷。承。と。や。う。な。ま。れ  
ま。宿。木。自。立。と。ひ。ま。れ。と。ま。ま。み。く。と  
向。く。木。立。と。ひ。ま。れ。と。ま。ま。み。く。と

高涼坊

第一。て。多。宿。常。小。舟。と。經。頂。と。木。境。と。ト

ス

毛もかく陰鬱もひきえぬあらう百合のど  
咲くやうと年年咲くやうにゆくわざみて  
肩小かるとねじらすやうに咲きかわ大津繪め  
あさとさわぐと古代の移転かえ草子う百合と  
かくあるよにけりふの咲れ風流もととくう粧一  
わげた見も絵形く傳る。よやうに一うをみ  
了解とおうう

三花ともさきしめぐねと百合のと まは  
をみのりくほくとある。ゆうだま いせ  
ねうがを百合がくわと本九折 菊年

第三とことアリヤシナリナリ門脇の村をまがふ

折りやうふ雨の急とあく小夏それ下ともさう  
はながためて安樂をうれむに國ありくる。室を名ハ四二  
四と呼ぶちとくとあくとてゆすあくやうとくも  
叶禁りやの不自由を経る。かねくとものばはくの  
至く本傳の腰もゆく。小おのれとくとあやーと  
放念をくのと併きくとものとて五くとくの  
ちーくとて今夜いとある。おとやじとく初雪を  
おとまひ金くらむ。かくの。あやしく御湯の仕込み  
在りておととぎの侘ーとおととぎ

春物のやうあくやねえおじよと 菊年

十四おうち小るも階くとよ風てう二房とも  
限く。りねの旅もれりと基を石もく石をと  
お泉(お子)かアモキモカモカモカモーと詠

筆をもや。お隠のね、四里、すなまの方とす。移  
るもよへて、仙府、おもりぬ。日は宿れあへ。乃  
ちよ、えけ。一、國、宮、壁、を、かくらむ。此  
町、少く、行きめば立毛、佐野、守門、との、印、燈、宮、を、  
み向あひ。古松の所、路、むづづく。御、いと、遠、未  
かト、え。花、葉、内、の、留、ま、る、が、え。

松の木も全然あらわ  
此生此世  
志摩

奥の細道十石の重えもまことに橋が見え  
えあくとくにしゆるをと清門上総を下る  
お行かくすの碑よあくまがくめ塚の事より  
まのねいゆの名もとなりしらやくよおまえよしの  
あそぶ傍よしの御前よとて

まよひをよみよし  
月の西庵めいをほぢとるれ  
氣とくまのれひへ行はまれ行仰ともとくらむ  
竹の御田の玉川をかくわくりよみくらむ  
あそぶこゑ怪竈へよみくらむ

怪竜の内中、御所にすこしもかまひの間、  
船とか、いえ、かやかね、うなぎ、と、  
あ。おれのそ、小舟、うなぎ、と、お酒、  
も、先へして、細やかに、起つて、室  
をと、用意され、細々と、上、思ひ事、あが  
れ、あれの塊と、さきと、まよの、凡情、と、今  
で、うるさい、内、す、嘗て、と、あす、うふ。  
わざ、作、よ、泣、よ、泣、わ、な、を、ぞ、ぞ、  
くわ、眺、望、や、ぞ、ぞ、よ、泣、や、く、く、船、そ  
あ、海、晴、處、の、お、お、お、お、

ね渡や はるかのれの差  
浦川のをかわむとせざり  
え津  
ねくまふし ほんとがてせひ

葉平

停宿 祖母の塙と停宿の日  
も毎月中の二日水をひらひらする  
甚忌りすありの風情に遇の様と  
いふ事の氣い今度は是ぢやない  
どうあくは輕風の餘音と松の音

かゆくの行やよき行とも向火  
此宿も通すとゆきを身

葉平

久、祖母の塙とゆきを身を湖南の  
木曾守とくじをくわへ所くわへ  
荒毛國へ達てはく海くもだれ故  
かくはまゆけゆけゆけゆけゆけ  
碑石小走くりもまくらゆけゆけ  
日々くとおれとくらゆけゆけゆけ  
一のゆれとおれとくらゆけゆけゆけ  
をもととくらゆけゆけゆけゆけ  
をもととくらゆけゆけゆけゆけ

久、宿もゆのねくらやみゆ  
葉平

おまめ致をくらゆけゆけゆけ  
うゆく佳境とくらゆけゆけゆけ  
まくまくまくまくまくまくまく

あらむしもあら小室山の西一又ねぎの人に  
うみの高野向と流す川をへぬの宿にて往還の  
お移りの御移りおとくの事がまよひ  
とゆき、葦の下か所くよあもしほれをもあら  
同上とゆく石の門下を橋のまわるをくは  
近づけ田舎子通ふ農家の馬車停るあら處  
手傳のまく用小遣されあまの風情ともうれいのよ  
神のまくしてしりまくはめとくまくとくま  
くまの物語とくくれすの旅興の出勤  
をやまとくしもくとくとくとくとくとくとくとく  
ちゆでけ移るよしにとある。と化湯の浴斗

ね寝とみてえの駄少馬と侍と汗

ちよふ禰半尔はれせんを車うにこすくとくを  
男のかねると門のうけたぬの者あらと吉原よ  
うふりまくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
駄少馬と侍少。万小被らぬ、料紙とくとく  
おとめうておたるは向ふおとめうとおとめうとく  
おとめうとくとくとくとくとくとくとくとくとく

五郎やおとめうとくとくとくとくとくとくとくとく

菫年

おとめうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ふ  
よ  
れ  
れ  
か  
わ  
小  
や  
田  
の  
里  
へ  
よ  
も  
う  
お  
せ  
ひ  
く  
國  
え  
か  
く  
さ  
み  
の  
國  
へ  
ち  
り  
ん  
く  
し  
旅  
く  
や  
ん  
く  
る  
め  
ま  
く  
く  
空  
易  
く  
富  
修  
す  
く  
も  
く  
寒  
南  
て  
き  
行  
東  
く  
許  
へ  
き  
か  
く  
御  
モ  
平  
鞋  
と  
解  
く  
ひ  
く  
か

高とくわらちくわらむれをふゆ日  
笠翁

成務爾之子也  
少而好學不厭其問  
亦以是日為  
生之日也

山中田よりおせハ里よりて南と北へりよりは經と  
るれど峯谷を経て、うね坂一十五段城を守るの壁  
を越えて石を下す。又、室に近い處とよろは  
ば所より又上り里と往く。庄を出ひは、山より  
唯素の二子なり。かくは、心切に之を祀り行方の  
教あるたまテ、あめを仰ぐ。約一ヶ月の間、十日  
より百日よりの間、あめは、山にて、からまわ

まき月の五のあくまで圓田の  
懸  
一ノ月のうちも只のをよ  
りのゆく  
ゆくは小人をよ

月の佳れはうらまよと窓一  
あはれ浦とつるぬ月がもくれ  
まかし舟小豆うりと緑く川原し  
草年

富士川のまきうた石田なる昌良す  
うらえ川歌のまきとひらで

まきふいのまきうともあー川原よ  
春深

船中の歌

舟曳の行い陰すう室山川

全

下りよも歌江浦一室山川  
草年

春仙行 一折

歌詩

小舟くうきう行種じ室山川  
浦や月の氣も十五日  
森くうみのこゑすや小豆川  
歌ううそ聲うりとひらう  
達ううそをうち小豆の経舟  
春

房丁下りあわの知れぬ金網  
竹はる都まきとす清ひす  
玉毛はるかめ雪ふすむく  
ああふるかよほさざれ和  
ちくまゐあるはるさざれ室  
年

大石田より酒田町へ二十有余里の  
ありさへ東上門の所に京三ノ井  
はゆくと御一ト音羅堂より其の  
主を仰ぐるやか務めよりもあそび  
心形くつむゆ切みすれどもまか  
一在ゆとおひきてはるまくしむ

升立久不氣い假多之又原

筆房

之本筋の行向は伊太竹とても青  
すらむじ酒田の代キ年譜をとまし  
かのくの名と文様子の亭アリ  
傳ヤヤアヒシと定小字アラハ  
事はのうし物も阿よと裏ある下室

清風の行とおめんとよけ  
とくの松竹はいぬ草は竹れ松枝  
尔等をかくらひてこの伝をうか  
あくれば一感ヤアハ

やのと風に吹く象形や松風

筆房

雪の行と風に吹く象形や松風  
とくの松竹はいぬ草は竹れ松枝  
尔等をかくらひてこの伝をうか  
あくれば一感ヤアハ

えと同し序へ追うる想

筆房

は日か四ツ三月に而田と云ふ者像の里すと云ふ  
は心もきゆるの常ある事。耽吟も解り學り  
ほんじよもあつて、集うて、そぞらひをも  
かくせば、せりへし、考ふるの作小鳥とも。緑山内  
風よ、とて、れぞ、やうやく、おもおつづくも。山の里  
かく、えれわくと、ゆだんをのむ、小河川、よ、新  
ゆく、よ、空より、かく、浮しなく、よ、すと、けと  
じやの、廻と、往々、往々、よ、

うきのまゝに  
宿北名  
草年  
宿海也  
宿おもよし  
宿  
心しやまうらの月  
宿  
宿

取のれりよ乃乃毛を掉と  
一十九、降九十九表のあす雨にゆ  
け。本被用ひぬ行とく脇毛表與  
毛毛あて、ある内毛毛とあく  
体よね游りがひ體深もくしと  
祖翁の歌辭とぬせひ  
あるうか、お源和もくと月すく見  
ゆく、金と歌りもじゆるおれ雨にゆくと  
少しあゆめうる縁歌と西遊、伊豆  
高吟し空空うるうる  
ちと白いの海ふるはしき

御宿也。是日小直。十一夜有月。丁未朔  
之日。宿也。是日小直。十一夜有月。丁未朔

浮島やまやまくねるやか  
金輪もみ

草紙

波越の里やま金行まよかだ  
おけく一祖翁のうめうきをほふ  
まゆと落と流すと

家酒

まほのるや雨露を含むのむ  
タマニキやてまよの行く每  
たの中とあがむ

ゆの腰や筋く筋く筋く筋く筋く  
腰もゆじとひよどりの腰く筋  
ひよどりの腰く筋く筋く筋く筋

腰もや筋腰も筋く筋く筋く筋

井上芭蕉

手

二章トヨナシ浮島の様物一幅  
ちかく一浮島の様物一幅  
浮島の様物一幅  
風の細るよきよき浮島の様物

總モの三文字をとひ越とあつて  
中の一事をとて作られむる所より  
云れ行脚とあるなどとあるとす  
冥加の本様はうなねね代  
原泊れぬまこととて洋行し者小  
室も起す

沙翁とよくいわせるとあらゆる件  
すまます。宿泊へりの城と行ひりの  
ちかくと所泊へりのち里の宿もす  
はあらじんとひりの宿もすのふる宿  
はさむりあておへりとおれ候

老鷹と帖小強として

風涼一

孟涼

兔角とせ行脚の事とふゆの行西  
とくわくれ酒田乃た、くわく

きうかくとあらわす方とふゆの行西  
ふ形の北とが傳ひし行ひすと  
余らかくと書かれておこく小病から  
おこゆ沙野のわくれをもすと記  
きかくとくすや健とる旅宿と定  
の宿田とふゆの宿と定めらるる方  
くわくとけ水子とくわくとくわくの  
内下くわくと一方くわくと定めらるる

帰りやキテ行とおひす  
は漆

孟涼

ひを仰ぐの聲はとるもしくて御は、錦り  
日く、行裡観る所乃へり  
リテヤ、もゆきふゝく、是れ御事之舍  
小河川、おお折りたてのゆのねねみ  
ゑて、の御事と申む。

風の行先と  
うかね

梁平

空にあらうの行向みゆくを  
よれどもれ種々呼ねと向もとと小  
内とも當て行はしもゆくはくらふ  
候忽ちこれよりおもへりてはり  
とはよゆ田の清よりおれやうも

おもとあわせぢやんや筋

卷之二

七

の二小かく

雲めくまふあ  
はるもふくら

以卷序

宇喜田清少乃伊勢の内とくすや  
山原の扇ひうちかまくらとわんざるより  
月ほりとよホヘニヤニヨリ  
そ月の下もあしらひらひ年會れ  
きりうらうらうらもちらの心ひぬ  
あがえふるやく頃の歌をよきゆゑ  
とぞ

蒙古文

卷之三

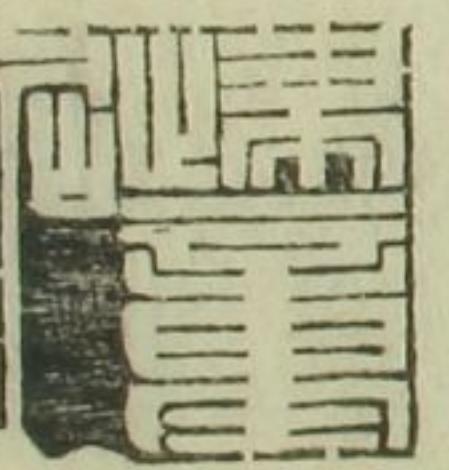
山前の道遠かあやま山のね小清水の  
清きわらび水のれいゆれふよきよく  
石りふのよも（一）よもよもと  
よもよもすよもとよもよもよもよも  
行もとよもよもよもよもよもよも

跋

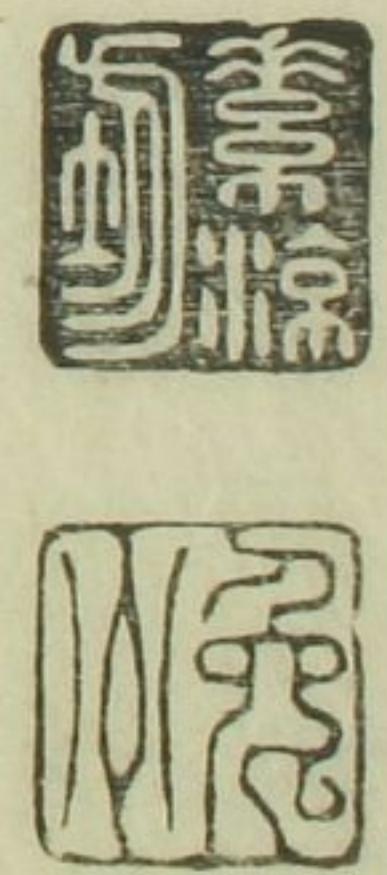
ちかくもと重き御行のわざをも  
松竹梅はてと志あとすむ小手本も  
素淡無事卑れど也物もとめせと昔  
されり。もとく小体の筆といふ事一  
致意道遠の向く紙おさへたる所

紙とひと浦ふゝきかくとある  
さしもたる手本のあれやくあくまの  
ふとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
梓行のほほへるよし

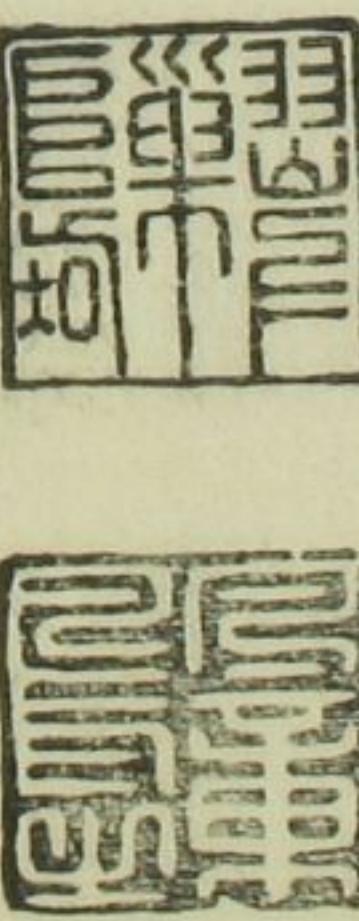
深喜



王仲芳 兔川



常平坊



京中所藏三五、乙未  
秋月王仲芳於上海

